

人権なら

2022年12月1日

第144号

NPOなら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

人権・包摂のまちづくりを

三宅町人権学習講座で岡本工介さんが講演

今年度最終の三宅町人権学習講座が11月22日、町交流まちづくりセンターMiiMoであった＝写真。一般社団法人タウンスペースWAKWAK事務局長の岡本工介さんが「人権・包摂のまちづくり」の演題で話をした。受講者は41人。



岡本さん(写真)は高槻市富田の被差別部落出身。ネイティブアメリカンと親交を深める旅を20年間、してきた。戻ってからは富田地域で社会的包摂のまちづくりに携わる。その傍ら、大学の非常勤講師も務める。

また、街にどんな仕組みがあれば社会的不利益を抱える人たちを支えることができるのかを大学院で研究する。信念は地域活動を外に見えるようにし、フロントランナーになっていくことだという。

部落差別は利害関係が絡んだら出てくる

大阪府内の各地域では、「一地区に一社会的企業」をテーマに部落問題を起点に社会課題を解決する実践的取り組みが行われている。部落の現状として、40代を境として部落差別を知っている人と知らない人の差が大きい。部落差別の課題は土地・ネット・結婚だ。差別は見えないから無いのではなく、利害関係が絡んだら出てくる。近畿大学の奥田均先生は、部落差別は「みなされる差別」であると言う。

部落問題は講演会などを通して啓発する方法と、まちづくりを通して啓発していく方法がある。そのためにも周辺地域と良い関係をつくっていくことが大事だ。以前、住宅には貧困・シングル・外国籍・障害などの、

街には社会的不利になる人がたくさんいた。その人たちを含め、住みやすい街をつくっていききたい。

富田地域は芸能・行商のムラだ。売れるものを考えて売り、時代に何が求められているのか考えてきた。富田では、持続可能な住み続けられる街をつくるプロジェクトを立ち上げている。

コミュニティ再生へ「つながる」「包み込む」場を

地域には、老朽住宅の建て替えをはじめ、地区まちづくりの基本構想がある。2018年の大阪北部地震は高槻市が震源地でもあった。大学と協



定を結び、高齢者や子育て世帯の声を集め、コミュニティ再生に向けた取り組みでは、「こんな街に住みたい」という「提言書」を子どもたち自身が市に提出。建設業者に発注する仕様書に反映してもらっている。

また、多様な人が「つながる。包みこむ。出会う」場所をコンセプトに空き家を有効利用するため、クラウドファンディングを実施している。コロナ禍で何もできなかったため、小学生に色んな経験をさせてやりたいと施設の設置を考えた。名称は子どもたちが考えた。ここでは研修会を開いたり、子どもたちへの学習支援などを行う。出会いの場、つながりの場となっている。

コミュニティ再生事業では、「自分には何ができるのか」「何を次に手渡していけるのか」を自問自答しながら、事業を立案してきた。この街に生まれて良かった。この街って素敵なお店だと思うことができ、喜びによって傷が溶けていく、思わず笑顔になるギフトを届けたい。自分が子どもの頃にしてもらった地域の育みを、多くの人たちに返していきたい、と語った。

岡山でハンセン病問題研修

田原本町企業内人権教育推進協が取り組む

田原本町企業内人権教育推進協議会は11月9日、岡山県にある国立ハンセン病療養所「長島愛生園」と「歴史館」を訪れる現地研修を実施した。参



加者9人は朝、マイクロバスで町役場を出発。現地到着後の午後、歴史館職員の案内でコースを巡った。

歴史館では、「ハンセン病はどういう病気か」「療養所内で患者たちはどのような生活を送っていたのか」を資料や写真、生活道具を見ながら説明を受けた。

排除・隔離の推進へ「無らい県運動」にまで

ハンセン病は「らい菌」に感染して発症する病気。感染力・発症力は極めて弱い。しかし、日本では、明治以降、「文明国としての恥」として、排除・強制隔離政策を押し進めてきた。最たるものは「無らい県運動」という国民運動にまで突き進んだことだ。

愛生園では、収容棧橋一回春寮一監房跡一納骨堂を巡った。収容棧橋は、患者が離島である長島に船で渡るとき到着する棧橋。回春寮は最初に消毒され、診察を受けた所。監房は療養所の規則を破った時に入れられる懲罰房。納骨堂は亡くなくても家族や親族の墓に入れず、名前も仮名で弔われた所。

大阪の「外島保養院」が住民の反対で岡山に

愛生園は1930年、岡山県の長島に国立として全国で最初に設置された。近くにある邑久光明園は、大阪にあった「外島保養院」が室戸台風で壊滅状態となり、関西で再建しようとしたが、住民の反対運動が起こり、最終的に長島に建設が決まった施設だ。

愛生園の入所者は現在、百十数人。平均年齢は88歳という。岡山県の内陸部と長島を結ぶ形で長島大橋が1998年に開通。以降、収容棧橋は使われなくな

った。記憶に残すため、崩れたまま、棧橋跡として残されている。

2時間に及ぶ研修を終え、帰路に。谷野守弘会長は「2時間では惜しい充実したものだった。今後もさまざまな人権問題に取り組んでいきたい」と語った。



人推協は10月12日、役員会を開き、今回の研修会開催を決めた。2年前に企画したが、コロナ禍で延期してきた。5月定期総会には、回復者の岡山育夫さんと支援センターの加藤めぐみさんを招き学習した。

楽しく子どもの居場所づくり

第5回みんなであそぼう会が10月26日、三宅町人権センターであった＝写真。子ども27人、サポーターとして大人8人が参加。や



よちゃんのつくってたのしもう(ものづくり)と、人権センターを利用して自由にあそぼう！から選択。ものづくりは石井弥生さんがアドバイス。手づくりガーランドをつくった。小さな木の皮小物を張り付けていく。できたものは持ち帰った。お母さんへの誕生日プレゼントにした子もいた。

ものづくりが好きな中学生3人も参加。おやつの中には駄菓子屋さんの手伝いもした。のんびり過ごしたい子は和室でゲーム、風船バレー、卓球、公園でのドッジボールなど、過ごし方を自分で決めて遊んだ。おやつ時間は、みんなが集まって駄菓子屋で菓子を買うように選んで食べた。ものづくりが終わるとみんなが集まり、ドッジボールや、おにごっこを始めた。

ものづくりには、つくる工程の楽しみほかに、自分らしさを表現できる魅力がある。作ったものを見ると発見や感動が様々で、その子にしかない感性があり、意外な一面が発見されたりする。

(山本 薫)

吉野川と街道のまち 大淀町

同和問題関係史料センターがフィールドワーク

県立同和問題関係史料センターの歴史講座が11月8日にあった。この日は「吉野川と街道のまち 大淀町」をテーマにフィールドワーク。竹中緑さん(写真)と、深澤吉隆・所長(写真)が案内した。



この地域は吉野の玄関口で、北からの街道が吉野川を渡って、さらに南下し、東西に通じる伊勢街道が交差する。近世までは吉野川の渡し場も栄え、人・物が行き交った。多くの史跡や文化財・芸能が残る。

巡り歩いたコースは桧垣本八幡宮—畜魂碑—万行寺(写真)—下湊八幡宮—鈴ヶ森行者堂—檜の渡し(写真)—吉野口分水頭口—吉野軽便鉄道跡。

近鉄下市口駅から歩き出し、桧垣本八幡宮へ。八幡宮は桧垣本の集落の北方台地の森の中にある。室町時代より吉野を中心に活躍した猿楽一座ゆかりの神社とされる。一座は卑賤視された芸能民だ。

大和同志会の東清吉が地域振興に尽力

桧垣本猿楽座は大和四座の一つ。『春日若宮神主裕光日記』(1404<応永11>年)や、同時期の吉野山金峰山寺の記録にも活動記録がある。

吉野山の吉水神社には、「桧垣本七郎」作の二つの面が残されている。面裏には「ヒカ井モト七郎」の銘と、「明応2(1493)年」の年号が読み取れる。

また、石川県金沢市の尾山神社に藩主前田家から奉納された「悪尉(あくじょう)」の面にも七郎の刻銘があり、その活動が北陸にまで広がっていたことがうかがえる。

大池と畜魂碑へ。大淀町役場と文化会館が建つ敷地は桧垣本八幡神社の池で、大池、宮池と呼ばれていた。池の側に屠殺場があった。現在、「畜魂碑」の



みが残る。

町役場で小休憩し、浄土真宗万行寺—下湊八幡神社(桧垣本八幡宮の分祠)へ。ここでは、「大和同志会」の副総理で、大淀町区長や町長を努めた東清吉の活動や、「大和同志会」についての説明があった。

同志会は部落差別撤廃を目的に1912(大正元)年に結成。一時休止したが、1941(昭和16)年まで存続。機関紙『明治之光』を発行し、第1号では部落住民の「一致団結」による「向上発展」と、その成果を全国に広げることがを目的とすることを明記する。



東清吉は小学校児童の補修教育を進めるため、青年会館の建設、共同浴場、共同井戸の改築・改修、託児所や養老院の設立など、地域振興に尽力した。

吉野川に「檜の渡し」「桜の渡し」「椿の渡し」

続いて、鈴ヶ森行者堂—檜の渡しへ。大峰山へ向かう修験者が立ち寄った一の行場。行者堂は車坂峠の石塚遺跡脇にあったが、1913(大正2)年、吉野鉄道開通のため、1938(昭和13)年、現在地(西町5丁目コミュニティセンター傍)に移築された。



本尊は役行者倚像。青石の石造で高さ71cm。宝暦年間(1751~1764年)に奉納された。「檜の渡し」は吉野川に古来存在した渡し場の一つ。吉野山への入口にあたる六田駅近くの「柳の渡し」が有名。下市の町に通じる檜の渡しも賑わった。大阪方面と下市、さらに黒滝・天川の奥地を結ぶ重要な渡し場だった。

ほかにも「桜の渡し」(上市)、「椿の渡し」(越部)などがあり、南北の交通路として利用された。

吉野川の河原で景色を眺めながら説明を受けた。すると、「海路」と「陸路」、その奥に広がる情景が浮かび上がり、人々の賑わいまでもが感じられる気がした。秋晴れのもと、気持ち良いフィールドワークだった。

アイヌ施策推進法を学習

多良良子さんと出原昌志さんが問題提起

『アイヌ施策推進法』の問題点をテーマにした学習会が10月26日、大和郡山市内であった＝写真。先住民族アイヌのいまを考える会が主催。40人が参加した。講師はメノコモシモシの多原良子・代表(写真)と、先住民族アイヌの声実現実行委の出原昌志・事務局長。



浅川肇・考える会代表は、昨年、巡回展を行ったが、「奈良では、アイヌ問題は遠い世界の出来事と思われる。学習会で現実を知ってほしい」と語った。

多原さんは、2019年5月に「アイヌ施策推進法」が施行され、3年が経過する。第1条で「アイヌは先住民族」と明記したが、国連の「先住民の権利に関する宣言」で明記する自己決定権、自治権、宗教的伝統と習慣の権利、教育の権利、民族としての生存および発展の権利など、多くの権利は認めていない。

第4条で「差別や権利利益侵害」は、してはならないと謳うが、実効性がない。ヘイトスピーチは拡大し、

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

気候変動が一層深刻化。パキスタンでは温暖化で氷河が溶け、国土の3分の1が浸水。北極圏の氷山も溶け、海面が上昇。陸地が水没する。作物にも影響。食料不足に。飢餓で数千万人もの難民が発生する。これらは、富裕層が吐き出す一酸化炭素のせいだ。日本は排出削減に不熱心。不名誉な化石賞を3年連続受賞する始末だ。温暖化対策の国際会議COP27は被害支援に「損失と被害」基金の創設を合意。先進国が豊かな生活を変えないと途上国の人々は生存できなくなる。人権を蹂躪する温暖化に対する対策は喫緊。安全安心に暮らせる地球生活が崩壊する前に。

閣僚や国会議員、地方議員が繰り返していると批判。アイヌ遺骨問題にも触れ、「遺骨や付随する副葬品は古くから人類学などの分野で研究対象にされてきた」。なのに謝罪のないまま、一部が返還されただけ。「アイヌの死生観、宗教観、世界観」を尊重すべきであり、遺骨のすべてを「出土地」に返還すべきだと話した。



出原昌志さんは「日弁連のアイヌ民族差別をめぐる取り組み」を話した。9月の日弁連の「人権擁護大会」で「アイヌ民族の権利の保障を求める決議」に国際交流委員会が反対した。内容たるや「民族差別(同化主義・植民地主義)」そのもので、「ヘイトを煽る」ものだとして、抗議・申し入れを行ったと語った。

水国争闘事件の現場を歩く

反差別・人権交流センターがフィールドワーク

反差別・人権交流センター「絆」は11月19日、「水国争闘事件現場を歩く」をテーマにフィールドワークを実施。吉田栄治郎さんが案内した。毎年、実施し、今回で11回目。26人が参加した。



コースは近鉄田原本駅－鏡作神社(写真)－八尾大橋－当センター事務所。終了後、昼食交流した。吉田さんは、事件のあらまし、時代状況、背景、事件後の水平社運動、解放運動に与えた影響について事件現場と事務所で説明した。道中、津島神社、本誓寺や田原本聖救主教会も見学した。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/